

アジア文化論 卒業論文演習

卒業論文題目

「オスマン帝国の工学校印刷所とその出版物について」

学籍番号 8500127

南・西アジア課程トルコ語専攻

関 章江

(40字×40行)

目次

はじめに	1
第一章 18世紀から19世紀前半にかけてのオスマン帝国の「近代化」	3
1. 「チュールップ時代」前後	
2. セリム3世の時代以後	
第二章 工学校の歴史	5
1. 海軍工学校の設立	
2. ニザーム・ジェディード運動と工学校	
第三章 工学校印刷所の変遷	8
1. 工学校印刷所の設立	
2. ナポレオンのエジプト遠征とその影響	
3. 工学校印刷所のウスキュダルへの移転と変容	
4. アブドゥル・ラフマン・エフェンディの失脚と新しい所長	
5. 1808年のイエニチェリの反乱とその後の影響	
6. ギリシア独立戦争の影響とイスタンブル側への移転	
第四章 工学校印刷所の出版物のリスト	12
1. 工学校印刷所の出版物	
2. ウスキュダル印刷所の出版物	
3. イスタンブル印刷所	
第五章 出版物に関する分析	21
1. セリム3世の時代とマフムート2世の時代	
2. 3つの時代区分	
おわりに	23
参考文献	

はじめに

18世紀になると西洋の存在は、徐々にオスマン帝国を軍事的に圧迫するものとなっていた。オーストリアやロシアといった西洋諸国との戦いのなかで、かつて自らが西欧に対して優位を誇ったオスマン帝国のあるべき姿に戻るべきであると主張する者がいる一方で西洋の優れた部分を認め、それらを取り入れて国を立て直そうとする者も存在した。特に直接的な問題である軍事力に関して西洋のものを取り入れていこうとする動きが、「近代化」を目指す時代の最初期に出てきたことは決して不思議なことではないだろう。そして、こうした軍事力の西洋化の動きの中で、西洋の技術を取り入れてそれを自らのものとしようとする志向も、あるいは必然的なものといえるかもしれない。

西洋式の軍事技術者を育成するために、オスマン帝国は工学校というものをつくって、そこで技術者の教育を行い、また学生を指導するために必要とされたテキストを印刷するための印刷所も設立している。こうした機関はオスマン帝国が近代技術を導入する際に重要な役割をはたしたものとして評価されている。特に印刷所については、授業のようにその場にいた人だけに広まるものではなく、メディアとしてより広い範囲で影響力を持っていたといえるだろう。しかしこの印刷所については、わずかな情報のしか知られておらず、その重要性にも関わらず、長年その実態については不明なことが多かった。

だが近年こうした状況を打破する記念すべき研究が行われ、その成果が書籍として広く広められることとなった。それが、Kemal Beydilli, *Türk bilim ve matbaacılık tarihinde Mühendishane matbaası ve kütüphanesi*¹という大著である。以下この本の著者とこの内容について紹介していきたい。

著者であるケマル・ベイディリはイスタンブル大学教授であり、長年オスマン帝国時代の古文書を元に、16世紀からアブデュルハミト2世の時代までの幅広い研究を行ってきたことで知られている人物である。彼はこれまで工学校学校についての知識が19世紀のメフメッド・エサードによって紹介されたもの²が、今まで繰り返し使われていることについて触れた上で、「ニザーム・ジェディード運動の一番重要な機関」の一つである工学校印刷所についてより確かで具体的な姿を描きだしたいとしている。また史料としては多くは総理府オスマン古文書館所蔵の古文書を使用している。

この本の内容は次のとおりである。まず第一章で海軍工学校と陸軍工学校について、歴史と授業や教師、工学校に関する法令の紹介、そして備品の様子を描き出している。第二章では工学校印刷所についての歴史と備品を整備していく様子、これに関する法令について記している。第三章では印刷所で出版された本の一部についての解説と、出版された本の全リストが収録されている。そして第四章では工学校付属の図書館の設立と本の収集の様子、備品と所蔵する本の一覧を紹介している。更に第五章では工学校での様々な仕事について（清掃や書記の仕事、画家や版画家や道具類の製造・使用の様子、印刷所の刊行物の値段など）細かく紹介している。また所蔵本と備品の紹介を5年分（1801、1816、1822、

¹ Kemal Beydilli, *Türk bilim ve matbaacılık tarihinde Mühendishane matbaası ve kütüphanesi:(1776-1826)*. İstanbul: Eren yayıncılık ve Kitapçılık, 1995

² Mehmed Es'ad, *Mir'ât-ı Mühandishâne*. İstanbul. 1896

1826、1836) 一覧にして収録しており、付録として法令などの転写と史料のコピーなどが付されている。本の全体にわたって実際の史料のコピーを多く載せて紹介している。

本稿ではこのケマル・ベイディツリの研究をもとに、工学校印刷所に関する情報を紹介し、それを踏まえてこの印刷所の出版物について若干の考察を行っていきたいと思う。工学校の出版物の分析から、18世紀から19世紀はじめの工学校印刷所の様子とオスマン帝国の一側面が明らかになるだろう。

第一章 18世紀から19世紀前半にかけてのオスマン帝国の「近代化」

この章では本稿が対象とする、18世紀から19世紀はじめまでのオスマン帝国の改革の様子について、主に軍事的改革と工学校、及び工学校印刷所に関係のあることを中心に大まかに見ていきたい³。

1. 「チューリップ時代」前後

1683年の第二次ウィーン包囲をきっかけとする神聖同盟との戦いを経て結ばれた1699年のカルロヴィッツ条約で、オスマン帝国は西欧諸国を対等な交渉相手として認め、その軍事的優位を承認せざるを得ないという状況におかれた。その後、1711年にロシアと結ばれたプルト条約においてカルロヴィッツ条約で失った領土を回復するが、7年後にオーストリアと結ばれたパッサロヴィッツ条約ではワラキア西部等を失い、オーストリアの東欧進出を認める形となってしまった。

このパッサロヴィッツ条約締結前の1717年に大宰相に就任したイブラヒム・パシャは条約締結後平和維持策を掲げて、西欧諸国との戦いを避ける方向に転じ、「チューリップ時代」を作り上げた。彼は外交使節を西欧に派遣し、西欧諸国の国際関係の把握や軍事力の観察を行わせるなど西欧を理解しようとし、同時に新しくもたらされた西欧の手法・風潮は帝国に大きな影響を与えた。またこういった外交使節の報告書の中でも、1720年からフランスに派遣されたイルミセキズ・チェレビー・メフメットによるものは、比較的な視点から記され、その後オスマン帝国でおこなわれるであろう改革のほぼ全てを包含しているといわれ、帝国の西洋化の歴史において最も重要な書物として評価されている。更にこの時代、改宗ムスリムであるイブラヒム・ミュテフェリカによって、オスマン帝国内のムスリムによる最初の印刷所が設立されており、イスラムに関する出版物は禁止されたものの、地理学や天文学に関する書物が出版されている。

パトローナ・ハリルの乱によって「チューリップ時代」が終わりを告げた後も、軍事面での改革は志向され、1731年フランス人砲兵将校ボンヌヴァルに砲兵隊の改革が命じられた。彼は1734年に、工兵育成のための幾何学学校を設立するが、この学校はイエニチェリ等の反対を受けすぐに閉鎖されてしまっている。(その後この幾何学学校と同様に、技術者育成を目的とする海軍工学校設立されるが詳しくは第2章で触れていきたい。)

2. セリム3世の時代以後

1789年に即位したセリム3世は、領土奪還のための軍の建て直しを目的として、外の世界の情報収集に努め、軍事改革に乗り出した。1791年にオーストリア・ロシアとの戦いが停戦に持ち込まれると、西洋諸国に使節を派遣して軍事・行政についての調査を行わせ、

³ 新井政美 『トルコ近現代史』みすず書房、2001年、1 36頁

永田雄三・加賀谷寛・勝藤猛 『中東現代史』山川出版社、1982年、57 - 77頁

国内の高官等には軍の改革案を提出させた。そして翌年には軍での行政的分野と純粹軍事部野の切り離しを命令した。この改革案は、ボンヌヴァルによる改革が行われた砲兵隊等では上手く進められたが、イエニチェリたちからは抵抗を受けた。さらにセリム 3 世は改革を進め、1793 年にイエニチェリに代わる西洋式歩兵部隊（ニザーム・ジェディード軍）を新たに創設した。だがこうしたセリム 3 世の改革に対する抵抗も大きく、1807 年のイエニチェリの反乱をきっかけにセリム 3 世は退位に追い込まれ、ニザーム・ジェディード軍も解散させられた。

セリム 3 世を退位させた勢力が彼による改革政策を破棄しようとしたのに対し、彼の政策を支持し復位を望むものもいた。このセリム 3 世を支持する勢力の代表者がブルガリアのアーヤーン、アテムダール・ムスタファ・パシャであり彼の復位のために実際に行動をおこすが、肝心のセリム 3 世が殺害されてしまったために、代わりにマフムート 2 世が玉座に据えられた。アテムダール・ムスタファ・パシャはニザーム・ジェディード軍の再建を目指す、イエニチェリの抵抗に直面し自らの命を失うことになってしまった。

こうした改革者たちの末路を見たマフムート 2 世だったが、やはり軍事力の強化のために「手のつけられるところから」改革を実行している。まず、砲兵隊・砲車隊の強化のために装備の近代化や、海軍強化のための新たな艦船の建造などが行われた。そしてイエニチェリ等の勢力に目を配りながら、地方のアーヤーンの権力を弱めていき中央集権的な国家を再建した。さらに 1826 年には、それまで何度も改革を頓挫させてきたイエニチェリ部隊の廃止と新たにムハンマド常勝軍が設立されることが決定され、「改革」への障害が取り除かれることになった。

第二章 工学校の歴史

以上のような改革の動きの中でも、軍事技術の面に積極的に「西洋」を取り入れた「教育機関」としての工学校は特に重要であるといえるだろう。この章ではその工学校について、その設立と歴史についてケマル・ベイディリに従って、18世紀終わりから19世紀のはじめまでの動きをたどっていきたい⁴。

1. 海軍工学校の設立

1768年から1774年にかけてのオスマン・ロシア戦争の最中の1770年、オスマン艦隊はチェシュメの海戦において、地中海に南下したロシア艦隊に敗れた。この事件はオスマン艦隊の脆弱さと海事技術に関する知識の不足具合を露呈し、これを認めざるを得ないという状況になった。そのためこうした不足を補うべく、フランス人たちの助けを借りた上で、艦隊の発展のための教育を行う計画が練られ、1776年までに決定された。また同じ目的でもって、1773年にバロン・ド・トットの援助により「幾何学学校」が開設されているが、この学校はしっかりとした支えのない脆弱な体制なものであったという。

フランス人の助けを借りて計画が練られた後の海軍工学校の基礎となる「幾何学教室」は、1776年に造船所区のダラアアチ地区に開校された。当初は教師1名、教師候補1名、生徒10名が任命されており、また週休2日制で幾何学、海図に関する授業が行なわれている。またこの学校の最初の教師であるジェザーイルリ・ハサンはイタリア語・フランス語・英語・スペイン語を操ることができた人物であったといわれている。さらに5年後の1781年には、政府の役人の子弟からなる50名がこの学校で授業を受けていたといわれている。しかし帝国で必要とされる「最新の」海事技術習得のために授業は難解なものとなり、またこうした難解な授業を強制的に受けさせることができなかつたため、学生が学校を修了したという記録は全て明らかではないという。

このため1782年から85年までこの学校の運営管理にあたった大宰相ハリル・ハミド・パシャは、この学校の枠内で改革を実施した。まず、1784年に造船所区の監督にあたったメフメッド・アタウツラー・エフェンディにより新しい建物が建設され、ここに学校が移転することになった。また、教育計画の刷新のための指導員の強化が図られ、フランスから招聘されたラフィット・クライブやモニエルのような技術者たちが教師として指導にあたった。また彼らは海事技師ではなく、築城等を専門とする技師であったが、この学校以外に技術教育を行なう機関が存在しないために、彼らはこの「海軍」に関する技術教育を行なう学校で授業を行なうこととなり、幾何学や地理学とともに築城学の授業もこの学校で行なわれることとなった。こうした状況を後押ししたのが、陸戦の技術への関心の高まりで、海だけではなく陸に関しても「新しい」技術が必要であることが認識されだしたのであった。こうした気運の中で、招聘されたフランス人技師達は、城の模型を使った実習での指導などを行った。また彼らによって用意された授業用の覚書は、ミランという翻訳者の手で翻訳され生徒たちに配布されている。さらに幾何学分野に関して新しい教師

⁴ Beydilli, pp.21-92

が 2 名任命され、学校での指導体制の強化が図られた。このように指導が強化された築城学、幾何学といった分野の授業は、後の陸軍工学校のもととなるものであった。

1785 年にはニザーム・ジェディード運動の「顔」とも言える人物であるムスタファ・レシド・エフェンディが学校の管理を任せられるが一年ほどで離職し、新任の管理者に学校の幾何学の教師であったカサバザーデ・イブラヒム・エフェンディが任命された。彼は学校の発展のために教育者の育成に乗り出し、1786 年には生徒たちのやる気を引き出すための措置として、優秀な 7 人の生徒を選抜し奨学金を給付した。またこの頃の授業体制は、陸軍に関する科目があるきまった期間の教育計画にのっとり生徒一人一人を教育し、修了証を公布したのに対して、海軍に關係する科目では陸軍關係の科目のようなシステムは出来上がってはいなかった。さらにこのような「あるきまった期間」の教育は、それまでの古典的「高等教育」とは全く異なった形であったために、学校での技術教育に耐えられるだけの力をつけられる様な公共の初等教育機関が存在せず、ある水準以上の生徒の確保が難しい状態にあった。教師たちについても、1791 年のズィシュトビの講和後、オスマン・オーストリア国境の制定に関わったミュデッリス・アブドゥルラフマン・エフェンディが、後にこの学校で教師として働いたように、ウレマー階級の出身者が学校での教育と管理を行っていたことは、初等教育機関が存在していないという点と結びつけて考えられる。だが 18 世紀の終わりには学校での教育全般が停滞してしまい、海軍關係だけでなく陸軍關係の授業でも同様の現象が見られた。さらにオスマン帝国がロシア、オーストリアと戦争を始めたことで、この二国がフランスに接近し 1788 年には学校で働いていたフランス人教師たちが帰国を余儀なくされるという事態になり、停滞に拍車がかかることになった。このように 18 世紀の終わりの海軍工学校は、当初目標とされた技術者の育成を行うには弱体化しすぎていたといえる。さらにロシアとの戦争の結果、軍の刷新とその計画についての意見が上申書として蓄積されることとなったが、それらが優先的に政策に反映されることもなくなってしまった。

2. ニザーム・ジェディード運動と工学校

1789 年にセリム 3 世が即位すると、領土の奪還を目指した様々な改革が行なわれることとなり、工学校もまたこの流れに乗ることになった。まず 1792 年に砲兵隊と土木部隊に関する最初の法が整備され、翌 93 年のこの法律の追加条項の中で、工学校は土木部隊の一部としてこの組織に統合されることが望ましいとされた。さらに工学校の授業で使用する書籍などを印刷するための印刷所の必要性が認識されるようになり、印刷所設立の決定がなされた。

さらに砲兵部隊・土木部隊には、大砲・銃・防御用の胸壁等の建築や弾を当てるための幾何学といった新しい技術・学問の習得が必要であるとされ、1793 年に砲兵部隊・土木部隊の兵士・将校たちについて金曜日・土曜日以外の週 5 日間は、工学校で自分たちに関係のある知識の習得を目指し、実習を行うことが決定された。またこれらの兵士については、工学校の生徒として認められ、部隊の運営は将校たちによって行なわれるようになった。また工学校で授業を受ける将校たちの昇進や、給料としてティマールを要求する者に対しては、まず工学校の教師たちが候補者の才能やその資格を有しているかという点において

審査をすることが決定された。一方で土木部隊に関しては、専門的な幾何学の知識を建築や下水道整備に生かすことが必要とされた。また人員の膨張といった事態を防ぐために学校で授業を受けながらティマールを受け取る者を 200 人とするという財政的な決定が行なわれた。またこの他に日給を受け取る将校を 50 名として、兵士と将校は 125 人ずつの 2 クラスに分けられた上で授業を続けることとなった。このクラスのうちの一つは下水道に関する専門的知識の習得を目的とし、もう一つでは橋や要塞といった軍事的に必要なとされるような建築と幾何学の専門的な教育が行なわれたが、どちらのクラスも教育の基本を幾何学におくという点においては変わりがなかった。これらの授業を受け持つ教師たちは 1793 年から 1794 年にかけて任命され、特に 93 年にはフランス人の艦隊製造技師であるル・ブルンや他のフランス人たちが教員として加わり、地図や地理学そして艦隊製造に関する教育部門が学校内で組織された。

1795 年から 96 年にかけて、93 年から建設されていた砲兵部隊と土木部隊のための新しい建物の中に陸軍関係の部門が引越し、さらに翌年には海軍部門で行なわれていた築城学の授業が陸軍部門に移され、ついに 1795 年、陸軍部門が帝国陸軍工学校として独立することになった。1798 年には艦隊製造技師であるル・ブルンやその他のフランス人たちがフランスに帰国してしまっただが、1801 年の砲兵部隊・土木部隊に関する法律では、それぞれの部隊における工学校の働きについての記述があり、軍の将校から 10 名が、そして建築学の教師も技術教育に新たに携わることが決定され、教師のポストの増設などで工学校の強化が図られている。5 年後の 1806 年には、工学校が砲兵部隊・土木部隊から独立した専門教育機関として、工学校の独立した法律が制定され、単独の教育機関として確立された。同年に砲兵部隊と土木部隊もそれぞれ独立した部隊として分離された。だが、1807 年にセリム 3 世が退位したことでニザーム・ジェディード運動が終わりを告げると、翌年の 1808 年に工学校に関する法律が制定され、再び統合された砲兵部隊と土木部隊に、工学校も吸収されてしまう。そしてイエニチェリが廃止される 1826 年まで、技術教育の場としての工学校は停滞を余儀なくされた。

第三章 工学校印刷所の変遷

工学校にはそこで使用するための教科書等を印刷するために印刷所がもうけられていた。この章ではこの印刷所の活動の歴史についてみていきたいと思う。

2. 工学校印刷所の設立

オスマン帝国における最初のムスリムによる印刷所である、ミュテフェリカ印刷所(1727年に設立)は設立者であるミュテフェリカの死後、カーディー・イブラヒム・エフェンディによって運営されたが、1782年までには活動を停止してしまっていた。その後、この印刷道具や機材などをフランス大使が相続人から購入したいという話が持ち上がるが、結局はメフメット・ラーシッド・エフェンディが、フランス側より高い金額を提示し、1781年から1782年の間にイブラヒム・エフェンディの身内から機材を買い取るようになった。一方、1795年には海軍工学校の組織内で、幾何学・算術に関するトルコ語の本の印刷や、パンフレットや解説書を確保することを目的とした印刷所の必要性が議論されるようになった。そしてこのラーシッド・エフェンディから印刷機材を購入して、印刷所を開設することが検討された。1797年には、彼の持っていた機材を国の所有物として買い上げた、工学校内で印刷所が開設された。

印刷所はハスキョイの工学校の地階に開設されたが、印刷所開設のためにこの地階に窓にガラスの取り付けや、ドアの取り付けといった改装が施されている。こうして造られた印刷所は幅13.5m、奥行き19.87mの部屋の中に、126.56 m²の印刷室と第一室から第四室の五部屋からなっていた。このハスキョイの工学校の印刷所は1797年の春から夏にかけて開設された。1798年の終わりにはマフムード・ライフ・エフェンディによる『オスマン帝国における新体制の描写』が出版され、その素晴らしい出来は、工学校印刷所の技術が大変優れていた例を示しているといえる。また1786-87年と1787-88年にはデ・ラフィット・クライブなどの手によるフランス語の本がトルコ語に翻訳されるなど、学問的な材料を提供した。

2. ナポレオンのエジプト遠征とその影響

1798年7月1日、ナポレオンによるエジプト遠征が始まり、1798年9月3日にはオスマン帝国がフランスに対し宣戦布告することになった。このためすべてのフランス人の所有物が没収され、ときには売り払われた。フランス大使はイエディクレで捕縛され、保護下におかれるという状況になった。このとき没収されたもののなかに印刷機材があり、この内容を詳しく調べたアブドゥル・ラフマン・エフェンディはその内容に満足し、ほかに売り払うことなく機材一式を工学校印刷所に移させた。フランスとの戦争が終わり、1802年6月25日にパリ条約が結ばれると、条約に従って没収された品物がもとの持ち主に返還されることになった。そこでフランスの代理大使であったルフエンが1803年はじめに請願書を提出し、戦争時に没収された印刷機材一式と書籍の返還を求め、ハスキョイの工学校に没収された印刷機材一式が持ち込まれている可能性を指摘した。この返還問題に関して「没収品調査官」としてイブラヒム・ネシン・エフェンディが任命され、フランスからの

接收品の内容を明らかにすることを一任された。彼はフランス代理大使から要求された一部の書籍に関しては特定が難しいことを挙げた上で、これらの書籍が辞書類や幾何学に関するものであることを突き止め、探し回った。そしてこの中からメニンスキーの辞書が見つけ出され、フランス側に返還されることになった。

3. 工学校印刷所のウスキュダルへの移転と変容

1802年まで印刷所はハスキョイの工学校の敷地のなかで運営されていたが、開設されてから5年近く経ったこの頃、敷地が手狭になってきているという理由から、他の場所への移転が検討され始めた。最初に検討されたのはイスタンブールのカパル・フリン地区で、実際に一時的に移転したものの、十分な広さが確保されなかったため、もう一度新たな移転場所が検討されることとなった。その結果、ウスキュダルのハレム埠頭にある帝室ワクフであるセリミエ・ワクフが所有する土地が、新たな印刷所の場所としてふさわしいという結論にいたった。そこで同じく1802年に印刷所はもう一度移転することとなり、このワクフの土地に作られた十分な広さのある立派な建物に移転した。またこの際、元の印刷所であった工学校の敷地内でそのまま何か印刷活動を続けていくことは検討されずに、工学校印刷所のすべての職員、印刷道具や機材が新しいウスキュダルの印刷所に移され、新たな場所での活動が始まることになった。

このような印刷所自体の移転が行われる一方で、印刷所の運営方法にも変化が現れていた。つまり国による全面的な運営ではなく、概算予算にのっとり自主的に運営管理を行うという方向へと変化したのである。資本を割り当てられ、自らの利益や損害の額に応じて自主的に経営されることになり、工学校印刷所は新たな段階へと進んだといえる。印刷所が自主運営されるにあたり、新たな物品と資金の追加が決定され、セリミエ・ワクフから毎月「収入」が得られることになった。組織は引き続きアブドゥル・ラフマン・エフェンディに任せられ、こうした資本でもって円滑に印刷所を運営することが期待された。

さらに印刷所はウスキュダルに移ったことで、工学校付属であったころよりも、より市場への対応が必要とされるようになった。つまり国内の市場の需要に答え、売れる本やパンフレットを印刷することで、自らの運営を行うことが求められたのであった。このため国内で需要のあるムスリムの「宗教」に関する本を多く出版するようになり、工学校時代の授業の本や辞書を中心とした傾向とは違う、新たな出版傾向を示すという変化が現れた。またこの頃、国内の物価が下がれば、本が売れなくなるかもしれないという議論が、出版物を引き受ける小売商たちの間で問題になり、出版物の価格は、国内の物価に応じて変えて言ったほうがよいといわれるようになった。安定した販売部数を確保して、小売商や教師たちの生活を安定させるべきであるという意見が出てくるようになったのである。しかし市場に対応していくべきという意見がある一方で、印刷所では公的な機関として政府関係の出版活動が行われている。この際、政府による注文に関しては、印刷した書籍やパンフレットの費用が、政府からあたえられる概算予算とは別に政府から支払われた。

4. アブドゥル・ラフマン・エフェンディの失脚と新しい所長

アブドゥル・ラフマン・エフェンディは印刷所がウスキュダルに移転する前後の11年間所長として印刷所の運営に当たり、地理学や地図の翻訳といった数多くの有益な仕事に携

わったが、その努力にもかかわらず 1807 年までに印刷所の財政は困難な状況に陥ってしまっていた。つまり、ウスキュダル印刷所は素晴らしい仕事をしてはいたものの、印刷したものが売れずに手元に残ってしまい、収支を合わせることが出来なくなってしまっていたのである。このため印刷所は財政的危機状態に陥り、出版活動も制限せざるをえなくなっていた。こうした運営危機を招いたことは所長であるアブドゥル・ラフマン・エフェンディの進退問題に発展し、このまま彼に運営を任せるか、それとも行政上・財政上の制限を加えた上で別の人物に一任するかが問題となった。この問題の裁定は外務大臣のメフメト・ガーリブ・エフェンディに一任され、行政上・財政上の条件をつけた上で財務管理局の元の長官であったサリフザーデ・ヒュセイン・ベイエフェンディが新しい印刷所所長に適任であるという決定に至り、1807 年 12 月 2 日、セイド・ヒュセイン・ベイエフェンディを新たな印刷所長として任命することが決定された。そしてトルコ語・アラビア語・フランス語・ギリシア語の本がウスキュダル印刷所以外で印刷されることを禁止し、以前からあった「独占印刷権」をさらに強化した。

このようにウスキュダル印刷所はセリム 3 世統治期にすでに運営資本の欠乏という財政的危機に直面していたが、この状態はセリム 3 世退位後もムスタファ 4 世の即位などの影響を受け、印刷所は「閉鎖されたような」状態に陥ってしまった。このような状況の下の 1808 年 7 月 23 日、印刷所の管理はヒュセイン・ベイエフェンディから、宮廷官吏であるアリ・エフェンディと宮廷軍属イマームのハーフィズ・メフメト・エミン・エフェンディの 2 名に委任されることになった。彼らは印刷所のこのような状況を改善すべく、翌 8 月の請願書で、ムスリム住民の要望を聞いて宗教関係の本を印刷することに触れた上で、これまでの「独占権」を強化する必要があることについて述べている。なぜなら資金難で半ば閉鎖状態にある印刷所に対して、イスタンブルの他の地区でムスリム住民の需要を満たすべく秘密裏に印刷業を行う人々がいたために、印刷所で労働者を集めて把握することができなくなっていたからである。そのためムスリム住民の要望を満たすために、イスタンブルのカーディー達と話し合うことが決定された。

5 . 1808 年のイエニチェリの反乱とその後の影響

1808 年 7 月にアレムダール・ムスタファ・パシャの軍事介入によってマフムート 2 世が即位した。実権を握りニザーム・ジェディード軍の再建を目指したアレムダール・パシャに対して、反感を持っていたイエニチェリたちは同年 11 月 14 日に蜂起し、彼を死に追いやった。更に「反逆者」たちは、かつてのニザーム・ジェディード軍にあたるセクバヌ・ジェディード（新猟犬番）軍を狙ってレヴェントとセリミエの兵舎を襲い、それらに火を放った。特にセリミエの兵舎はここを防衛する兵士の数も少なく、防衛にあたったアルナブード・ムスタファも死亡し、兵舎も焼かれ、同時に兵舎周辺も戦火で破壊され、略奪された。「セリミエ兵舎とその周辺で焼け残ったのは、部分的に被害を受けたセリミエ・モスクのみ」という惨状を呈したこの乱で、ウスキュダル印刷所も被害を受け、印刷所にあった本や印刷道具、機材、作業台などは略奪もしくは破壊され、一部は消失してしまった。だがこのような被害を受けても、なお印刷所の運営は続けられ、道具・機材の整備や国やセリミエ・ワクフからの債務を返済するための努力が続けられたのだった。

だがこの困難な情勢下で、協力して印刷所の経営を行ってきたハーフィズ・メフメト・

エミン・エフェンディとアリ・エフェンディだったが、二人の間に溝ができてしまい、ついにアリ・エフェンディが職を辞してしまうという事態になった。共に印刷所の運営を担ってきた仲間から職を譲られる形となったメフメト・エミン・エフェンディだったが、印刷所をうまく運営することができずに、業務を停滞させてしまうことになった。なぜならこの頃の印刷所は、イエニチェリの反乱後に機材を整備するために負った債務の返済に向けた努力を行っていたものの、出版した本が売れないためにこうした債務の返済ができないという状況に追い込まれていたからである。こうした苦しい状況の中で、メフメト・エミン・エフェンディは印刷所の運営を 1817 年まで任されることになったのであった。

1814 年には歴史家アーシム・エフェンディの『大辞典』の翻訳が決定されるが、印刷所の機材等は酷い状態であり、また労働者達も散り散りになってしまっていた。このような惨状の中で、印刷所を再びイスタンブル側へと移転する話が持ち上がり、候補地となったビュユック・ハーフィズの訓練所に移すかどうかを検討されたが、結局ウスキュダルに留まることが決定され、『大辞典』翻訳のための準備を強化することと、印刷機材などの不足品を補充することが決定された。

1817 年には所長がメフメト・エミン・エフェンディからアブドゥルラヒム・ミュヒブ・エフェンディに変わり、前任者が残した国への債務を返済するための努力が続けられたが、新たに活字を鋳造したことによる支出などで債務はさらに膨れ上がることになってしまった。

6 . ギリシア独立戦争の影響とイスタンブル側への移転

1821 年のギリシア人の反乱から起こったギリシア独立戦争の影響で、イスタンブルの治安は不安定化することになった。このためギリシア系の住民が戦闘的なサボタージュを行う可能性があるとして、重要な役所からのギリシア系住民の追放が行われるようになった。そのためウスキュダルの印刷所でも、労働者にギリシア系住民ではなくムスリムを採用しようという動きが持ち上がった。そして 1821 年から所長を任されていたイブラヒム・サイード・エフェンディによって、ムスリム労働者を確保し易い「イスタンブルの内の適切な街区」への印刷所の移転が検討され、スレイマニエのカプタン・イブラヒム・パシャ・ハママが候補地とされた。この移転案は大宰相によっても承認され、ウスキュダルの印刷所にあった印刷機材や書籍などが帳簿にまとめられた上で、1824 年 6 月 7 日、移転のための準備が整えられたカプタン・イブラヒム・パシャ・ハママに印刷所が移転することになった。この際、イブラヒム・ミュテフェリカからラーシッド・エフェンディの手に渡った印刷機材一式の様に古くなってしまったものは、売却するためにウスキュダルに残され、使えるものだけがイスタンブル側に移されることになったのだった。

第四章 工学校印刷所の出版物のリスト

第三章でみたような変遷をたどった工学校印刷所では実際にどのような本が印刷されていたのだろうか。この章では工学校印刷所の書籍等について(1)工学校時代(2)ウスキュダル時代(3)イスタンブルに移転後しばらくの間と年代別に3つに分類して紹介したい。

なお、印刷物のリストについては Kemal Beydilli, *Mühendishane ve Üsküdar matbaalarında basılan kitapların listesi ve bir katalog*⁵. İstanbul: Eren Yayıncılık, 1997 が新しいものであるが、このリストは Beydilli 1995⁶ をもとに作成した。

1. 工学校印刷所の出版物

2)と3)については印刷された場所が明らかではないが、年代別ということでこの部分に含めた。

1) 1797年 『清潔な水』 *Mehâhü'l-miyâh. (Su Risalesi)*.

工学校印刷所で印刷された最初の小冊子。イスタンブルの泉水と水に関するもの。11ページの傍注にメートル法⁷による挿絵を入れている。14丁、11ページ。

2) 1798年 『対数表』 *Logaritma Cetveli*.

印刷された場所、時期については明らかではないが、(3)と同時期に印刷されたことが認められている。271ページ。

3) 1798年 『砲弾表』 *Humbara Cetveli*.

273ページ。

4) 1797 - 98年 Hüseyin Rıkıfı Efendi, Selim 『幾何学の方法』 *Usûl-i hendese*.

工学校の教頭と、イギリス出身の改宗者である技師によって Bonnycastle から翻訳された「ユークリッド幾何学」の本。272ページ。

5) 1798年 Mahmûd Râ'if Efendi 『オスマン帝国における新体制の描写』 *Tableau des Nouveaux Règlements de l'Empire Ottoman*.

ニザーム・ジェディード運動を外国人に紹介する目的で作られる。フランス語で記され、36葉の図を収録し、工学校印刷所の素晴らしい印刷技術を示す例として有名。1802年にはパリとストラスブールで発行された。60ページ、200部。

⁵ Kemal Beydilli, *Mühendishane ve Üsküdar matbaalarında basılan kitapların listesi ve bir katalog*. İstanbul: Eren Yayıncılık, 1997

⁶ pp.253-261

⁷ フランス国民議会が1791年に実施を決定し、1799年に正式に採用された。

- 6) 1798年 Sünbülzâde Vehbî⁸ 『ヴェフビーの贈り物』 *Tuhfe-i Vehbî*.
Şahîdîの著作をもとにつくられたペルシア語とトルコ語の韻律小辞典。55ページ。
- 7) 1798 - 99年 「パンフレット」 *Evrâk*.
ギリシア語で書かれた小冊子。ベネツィア領からフランス領になった島々のギリシア系住民へのロシア等の影響力の増大に対して、ギリシア系住民をオスマン帝国寄りにしておくために作成されたもの。400部。
- 8) 1799年8月25日 Hüseyin bin Halefî-i Tebrizî (Mütercim Ahmed Âsım Efendi 訳)
『⁸』の翻訳における有益な報告』 *Tibyân-ı nâfi der Terceme-i Burhân-ı Katî'*.
Hüseyin bin Halefî-i Tebrizîによって50に及ぶペルシア語の辞書から編纂された21004語の辞書をMütercim Ahmed Âsım Efendiが翻訳したもの。863ページ。
- 9) 1799 - 1800年 「パンフレット」 *Evrâk*.
フランス語によるプロパガンダのための小冊子。エジプトを占領しているフランス軍の士気を落とす目的で作られエジプトに送られる。
- 10) 1800年6月 Ahmed Hayatî Efendi 『『ヴェフビーの贈り物』への注釈』 *Serh-i Tuhfe-i Vehbî*.
『ヴェフビーの贈り物』の注釈書で、韻律学の辞書。503ページ。
- 11) 1801年5月 Hüseyin Rıkfı Efendi 『形式の要約』 *Telhîsü'l-eşkâl*.
工学校の教頭によって記された戦時の下水道と射撃に関する本。工学校の授業用テキストとして用いられ、1805 - 06年に再版された。60ページ、100部。
- 12) 1801年 Şeyhülislâm Mehmed Es'ad Efendi 『ことばの辞書』 *Lehçetü'l-lugat*.
シェイヒュルイスラームのメフメット・エサード・エフェンディによって記されたトルコ語 - アラビア語 - ペルシア語の辞書。851ページ、1000部。

2. ウスキュダル印刷所の出版物

- 1) 1801 - 02年 『子供の数珠』 *Sübha-i sibyan*.
子供向けのアラビア語 - トルコ語小辞書。「マフムディーエ」と呼ばれる。33ページ。
- 2) 1802年 Anton Fonton 『輸出入の為にすべてのロシア商人が帝国での貿易において港で支払う関税の翻訳とアルファベット順の表』(『関税表』) *Tarif de Douane que les négocians de Sa Majesté l'empereur de toutes les Russies doivent payer dans les états*

⁸ 詩人、学者でもあったマラシュ出身のオスマン官僚。様々な土地でカーディーとして働いている。1795年には使節としてイランに派遣された。(1718 - 19? - 1809)

de le Sublime Porte, sur les marchandises d'importation et d'exportation, traduit et mis en ordre alphabetique. (Gümrük Tarifesi).

駐イスタンブルのロシア大使館の通訳によってフランス語で記された。輸出入される品物を列挙し値段を明らかにしたもので、オスマン帝国とロシアの間で決定された。この種のものでは工学校印刷所で印刷された唯一のもの。53 ページ。

3) 1802 年 8 月 9 日 Hüseyin Rıfıfı Efendi 『技師としての試練』 *İmtihânü'l-mühendisîn.*

工学校の教師であるヒュセイン・ルクフ・エフェンディによって英語から翻訳される。工学校のテキストとして使われ、1805 - 06 年にかけて再版された。115 ページ、40 部。

4) 1802 年 8 月 İmâm Ebu Nasr İsmail bin Hammâd el-Cevherî 『「増補」辞書』
Vankulu lugatı.

ジェブヘリーの著書である『増補』*Vankulu* を Mehmed bin Mustafa el-Vanî がアラビア語から翻訳したアラビア語 トルコ語辞書。655 ページ、800 部。

5) 1803 年 Seyyîd Mustafa 『技師ムスタファによるコンスタンティノーブルの自然科学における工兵隊の軍事技術の現状への批判』 *Diatribes de l'ingenieur Mustafa sur l'état actuel de l'art militaire du Génie et des sciences à Constantinople.*

1795 年に教育が始められた海軍工学校の最初の生徒の手による冊子。ニザーム・ジェディード運動の紹介と学問への意欲を表明した小冊子。33 ページ。

6) 1803 年 Faden 『翻訳版大地図』 *Atlas-ı Kebîr Tercemesi.* Mahmûd Râif Efendi 『地理学への案内』 *İcâletü'l-coğrafıyye.*

工学校印刷所で印刷されたもののなかで、最も芸術的価値があり、かつ最も高価な書として知られる。『大地図』は英語からの翻訳で 24 枚の地図からなる。地図は 24 葉、書物は 80 ページで共に 50 部印刷された。

7) 1803 年 9 月 Mehmed bin Pîr Ali Birgivî 『ビルギヴィーの論考』 *Risâle-i Birgivî.*

Mehmed bin Pîr Ali Birgivî⁹の伝記を宮廷本を基にして出版したもの。工学校印刷所で印刷された最初の宗教書。86 ページ。

8) 1803 年 9 月 Güzelhisarî Zeynîzâde Hüseyin bin Ahmed 『よくわかる格変化』
Mu'ribü'l-izhâr.

ビルギヴィーによる『神秘の開示』*İzhârü'l-esrâr* の統語論に関係するアラビア語学の関する文献への注釈書。1809 年に再版される。362 ページ。

9) 1804 年 Sünbülzâde Vehbî 『ヴェフビーの贈り物』 *Tuhfe-i Vehbî.*

⁹ バルケシル出身の知識人。文法学・神秘主義・法学・コーラン学等様々な分野に足跡を残す。(- 1573)

辞書。(1 - 6)の第二版。

- 10) 1804年12月『礼拝手引書』 *Şurûtu's-salât*.
子供向けの「ナマズ・ホジャ」の本。23ページ。
- 11) 1804年7月終わり Kasdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi 『信仰を表明することによる功德の比類の無さについて』 *Ferâ'idü'l-fevâ'id fi beyâni'l-akâ'id*.
セリム3世の姉妹に献呈された教義解説書。1808年、1817年、1828年、1837年と再版される。298ページ。
- 12) 1804年6月 Kasdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi 『ムハンマドの遺言の解説におけるアフメッドの素晴らしい宝石』 *Cevhere-i behiyye-i Ahmeddiyye fi Şerhi'l-Vasiyyeti'l-Muhammediyye*.
ビルギヴィーの宗教書である『論考』への注釈書。315ページ。
- 13) 1804年11月 Vekâyî-i nüvis Ahmed Vâsîf Efendi 『世紀の美德と正義への障害の歴史』 *Mehâsinü'l-âsâr ve hak-âikü'l-âhbâr*.
1752年から1774年にかけての歴史書。2巻本。第一巻は327ページ、第二巻は315ページ。
- 14) 1805 - 06年 『幾何学の方法と三角法』 *Usûl-ı hendese ve müsellesât*.
工学校の授業テキストとして使われた幾何学書。第二版。100部。
- 15) 1805 - 06年 Hüseyin Rıkfî Efendi 『下水道学論考(形式の要約)』 (*Telhîsül-eşkâl*).
Fenn-i lâğim risâlesi.
(1 - 11)の第二版。工学校の授業用テキストとして出版された。100部。
- 16) 1805 - 06年 Hüseyin Rıkfî Efendi 『技師の集大成』 *Mecmû'atü'l-mühendisîn*.
工学校の授業用テキストとして使用された幾何学書。293ページ、100部。
- 17) 1805 - 06年 Gelenbevî İsmâil Efendi 『三角法論考』 *Müselles Risâlesi*.
工学校の授業用テキストとして使用された幾何学書。100部。
- 18) 1805 - 06年 Hüseyin Rıkfî Efendi 『技師としての試練』 *İmtihânü'l-mühendisîn*.
幾何学に関する本で(2 - 3)の第二版。
- 19) 1805年8月 Şeyh Mustafa bin İbrâhim 『ビルギヴィーの偉大な「統語論」への友の贈り物』 *Tuhfe-i ihvân 'alâ avâmili'l-Birgivi*.
ビルギヴィーの文法書である『統語論』への注釈書。88ページ。

- 20) 1805 年 4 月 Zeynizâde Hüseyin bin Ahmad 『ビルギヴィー方式の「統語論」への注釈』 *Şerh-i Avâmil-i Cedîd-i Birgivi*.
ビルギヴィーの文法書である『統語論』への注釈書。118 ページ。
- 21) 1806 年 Ksdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi 『功德の比類の無さについて』 *Ferâ'idü'l-fevâ'id*.
教義解説書。(2 - 11) の第二版。
- 22) 1806 年 3 月 Müftizâde Mustafa Âşir Efendizâde 『有名な誤りを改善するための散文の真珠』 *Ed-dürerü'l-müntehabâtî'l-mensure fi islâhi'l-galati'l-meşhûre*.
よく間違って使われる言葉に関する文法書。本文の頭にこの問題に関する書物と著者名を挙げている。534 ページ。
- 23) 1807 年 2 月 Gelenbevî İsmâil Efendi 『論証』 *El-Burhân*.
論理学書。83 ページ。
- 24) 1808 年 Ksdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi 『素晴らしい宝石』 *Cevhere-i behiyye*.
宗教書。(2 - 12) の第二版。
- 25) 1809 年 『よくわかる格変化』 *Mu'ribü'l-izhâr*.
文法書。(2 - 8) の第二版。385 ページ。
- 26) 1809 年 Sünbülzâde Vehbî 『ヴェフビーの贈り物』 *Tuhfe-i Vehbi*.
文法書。(1 - 6) の第三版。
- 27) 1809 年 5 月 Câmî 『ジャーミーの「注釈」における神聖な書物』 *Kitâbü'l-Muharrem fi Hâşiye-i Câmî*.
Ibn-Hacîb の『脚韻』 *Kafiye'* への注釈書。757 ページ。
- 28) 1810 年 Kasdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi 『素晴らしい宝石』 *Cevhere-i behiyye*.
宗教書。(2 - 12) の第三版。
- 29) 1811 年 Şeyh Mustafa bin İbrâhim 『友の贈り物』 *Tuhfe-i ihvân*.
文法書である(2-19)の第二版。
- 30) 1812 年 7 月 Abdülhakim bin Şemseddin es-Seyalkûtî 『Mutavval へのセヤルクトゥウの傍注』 *Hâşiyetü's Seyalkûtî' alâ'l-Mutavval*.
論理学書。Ahmed bin Yahya el-Tahtazanî の『ムターヴァル』 *Mutavval* (アラ

ブ文学に関する書物) への傍注。663 ページ。

31) 1814 年 4 月 Kasdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi『素晴らしい宝石』*Cevhere-i behiyye*.

宗教書。(2 - 12) の第四版。

32) 1814 年 12 月 Tahir Muhammad bin Yakub Firuzâbâdî『「知識の大辞典」の翻訳における大洋』*El-Okyanusü'l-basît fi Tercemeti'l-Kamûsi'l-Muhit*.

アラビア語の辞書。Mütercim Âsım によって付録がつけられる。3 巻本。第一巻は 1814 年 12 月印刷、943 ページ。第二巻は 1815 年 12 月印刷、939 ページ。第三巻は 1817 年 11 月印刷、973 ページ。各 500 部、計 1500 部。

33) 1817 年 Kasdızâde Ahmed bin Mehmed Emîn Efendi『素晴らしい宝石』*Cevhere-i behiyye*.

宗教書。(2 - 12) の第五版。

34) 1817 年『功德の比類のなさについて』*Ferâ'idü'l-fevâ'id*.

教義解説書である (2 - 11) の第三版。

35) 1817 年 Sünbülzâde Vehbî『ヴェフビーの贈り物』*Tuhfe-i Vehbi*.

辞書。(1-6) の第四版。

36) 1817 年 5 月 Derbiş elhâc Mehmed Edîb bin Mehmed Efendi『大巡礼の手引き』*Nehcetü'l-menâsik*. (巡礼手引書)

1779 年に著者が行った大巡礼の様子を描写したもの。巻末に独立して Mustafa Reşid と Hekımbaşî Mustafa Behçet Efendi による『処方部』*Tertîb-i Eczâ* を収録し、巡礼の旅の途中で起こるであろう心配事についてのすばやい対処方法と治療法を紹介している。255 ページ。

37) 1818 年 3 月『アラビア語文法大全』*Sarf Cümlesi*.

学校で教えられるアラビア語学のためのテキスト。5 つの論文からなる。119 ページ。

Ahmed bin Ali bin Mes'ûdü 「字面の段階」*Merâhu'l-ervâh*. (単語の構成に関して) 43 ページ。

Şeyh İzzedin Ebil-Fazail Abdulvehhîb İmadeddin bin İbrâhim es-Sencârî 「判断」*İzzî*. 44 - 59 ページ。

「客体」*Maksûd*. (動詞の分類に関して) 60 - 77 ページ。

「形式」*Bînâ*. (動詞の語根に関して) 78 - 87 ページ。

「派生の語形変化表」*Emsile*. (動詞の活用に関して) 1 - 32 ページ。

38) 1818 年 8 月 Gelenbevî İsmâil Efendi『ゲレンベヴィーの傍注』*Hâşiyetü'l-Gelenbevî*.

教義に関する本。Celâleddin ed-Devânî の『奴隷の信条』 Akâ'id-i Abdiyye の注釈へのゲレンベヴィーの傍注。657 ページ。

- 39) 1819 年 8 月 Gelenbevî İsmâil Efendi 『美辞に関するゲレンベヴィーの覚書』
Ta'likâtü'l-Gelenbevî alâ Mîri'l-Adâb.

修辞学に関する本。Mîr Ebu Feth es-Sâ'idî (- 1543) の『美辞』 *Mîrû't-Adâb.* へのゲレンベヴィーの覚書。1775 年に完成。609 ページ。

- 40) 1819 年 8 月 『「ミリュト・テスヒーブ」へのゲレンベヴィーの覚書』
Ta'likâtü'l-Gelenbevî alâ Mirû't-Teshîb.

修辞学に関する本。Mîr Ebu Feth es-Sâ'idî の『ミリュト・テスヒーブ』 *Mîrû't-Teshîb.* へのゲレンベヴィーの覚書。514 ページ。

- 41) 1819 年 4 月 『アラビア語文法大全』 *Sarf Cümlesi.*

学校の授業のためのアラビア語学の書物。3 つの論文からなる。72 ページ。

İbn-i Hacîb 「韻」 *Kâfiye.* (統語論に関する論考) 1 - 30 ページ。

Birgivi 「神秘の開示」 *İzhârü'l-esrâr.* (統語論に関する論考) 34 - 64 ページ。

Birgivi 「統語論」 *Avâmil-i Cedid.* (統語論に関する論考) 66 - 72 ページ。

- 42) 1820 年 『身体組織の透視図』 *Mîr'âtü'l-ebdan fî teşrîh-i azâi'l-insân.*

医学書。2 巻本。第一巻は 131 ページ、第二巻は 283 ページ。各 400 部、計 800 部。63 葉の図を収録する。

- 43) 1820 年 『ネセフィイエーの宗教的教訓の注釈に関するモッラー・エル・グヤシィエの傍注についてのセヤルクトゥの名で知られるブドゥルハーキムの覚書』
Ta'likât-ı Abdülhakîm el-meşhûr bi Seyalkutı ale'l-haşiyet li Molla el-Gıyasıye ala Şerhi'l-aka'idi'n-Nesefiyye.

アラビア語による教義書。392 ページ。

- 44) 1820 年 Tokadlı Es-Seyyîd Ömer el-Ebherî 『エイサゴーゲーに関するナージーの輝ける覚書』 *Ta'likât-ı dürrü'n-nâcî bi İsagoci.*

13 世紀の Esireddin bin Ömer el-Ebherî の『エイサゴーゲー (入門の書)』¹⁰ の翻訳に関する注釈書への覚書で、1795 年に完成している。183 ページ。

- 45) 1821 年 Mevlâna Ali bin Hüseyin 『人生の本質』 *Reşehât-ı aynî'l-hayat.*

16 世紀に記されたナクシュバンティー教団のシャイフの伝記。654 ページ。

¹⁰ 『アリストテレス範疇論入門』、エイサゴーゲーは通称。3 世紀の新プラトン主義の哲学者であるポルピュリオスの著書。

- 46) 1822 年 2 月 『ペルシア語とダリー語に関する韻文美辞の贈り物』
Tuhfetü'l-manzûmetü'd-dürriye fi lugatî'l-Farsiyyet ve'd-deriyye.
「ヴェフビーの贈り物」の第二版。511 ページ。
- 47) 1822 年 『ビルギヴィーの「論考」の要約』 *Hülâsa-i Risâle-i Birgivi.*
伝記。著者名は不明。24 ページ。
- 48) 1822 年 Mehmed bin Ahmed Kudûsî 『ファトワーの真実』 *Neticetü'l-fetevâ.*
クドゥースーによって出されたファトワー集。683 ページ。
- 49) 1822 年 Abdülhakîm bin Şemdeddin el-Seyslkûtû 『論理の規則を記述することでの
名誉への不安』 *Haşiyeye 'alâ Tahrîri'l-Kavâ'idi'l-Mantıkye.*
論理学書、617 ページ。
- 50) 1823 年 Sünbülzâde Vehbî 『ヴェフビーの贈り物』 *Tuhfe-i Vehbi.*
辞書。(1 - 6) の第五版。
- 51) 1822 年 11 月終わり Masadâriyyecizâde Seyyîd bin Hüseyin Efendi 『幾何学論考』
El-Risâle fî'l-hendese.
著者は工学校の校長。7 葉の幾何に関する図を収録。34 ページ。
- 52) 1824 年 『神学の休憩所』 *El-Mevâkıf fi ilim'l-keâm.*
8 世紀の神学書への注釈書。アラビア語で記される。後にイスタンブルで 1869 - 70
年、1875 - 76 年、そして 1893 - 94 年に再版される。635 ページ。
- 53) 1824 年 2 月 Ali Kuşçu 『世界の表裏』 *Mir'ât-ı âlem.*
15 世紀のアラビア語による天文書 (*Fethiye*) をトルコ語に翻訳したもの。4 枚の図
を収録する。ウスキュダル印刷所で初めてターリク体の活字が使用される。130 ページ。
- 54) 1824 年 7 月 20 - 30 日 İbrâhim Halebî 『輝く名前』 *Gunyetü'l-mutemelli.*
教義に関する本。 *Mülteka* の著者であるハレビーによる İmâm Kaşgarî の
Munyetü'l-musalli へのアラビア語の注釈書。ウスキュダルでの最後の印刷物。278 ペ
ージ。

3. イスタンブル印刷所

- 1) 1824 - 25 年 Şeyhizâde Abdurrahman bin Şeyh Mehmed bin Şüleyman 『河の合流点
の解説における大河の撰集』 *Mecma'u'l-ehur fi Şerhi'l-Mülteka'l-ebhur.*
イスタンブルの印刷所で印刷された最初の本。教義に関する İbrâhim Halebî の
Mülteka への注釈書。2 巻本。第一巻は 1824 年 11 月 1 日印刷、352 ページ。第二巻は

1825年4月20 - 30日に印刷、374ページ。

- 2) 1825年9月15日 İmâm Muhammed bin Hasan es-Seybânî 『**翻訳版 偉大なるスンナ**』 **Siyer-i Kebîr Tercümesi**.

İmâm Muhammed bin Hasan es Seybânî(- 805)によって記されたスンナを1796年から1798年にかけて Ayintâbî es-Seyyd Mehmed Münip Efend が翻訳したもの。2巻本(357ページと375ページ)、1000部。

第六章 出版物に関する分析

次に前掲の出版物に関する分析を行いたい。分析は、1797年から1824年を年代別に行うが、時代の区切りは(1)セリム3世期とマフムート2世期の二区分と(2)工学校に印刷所があった時期(1797-1801)・ウスキュダルに移転してからイエニチェリの反乱で被害を受けた年まで(1802-1808)・経営難の状態が続きイスタンブル側に移転するまで(1809-1824)の三つに分ける区分が考えられる。そこでこの章ではこの二つの分け方に従い、各時期の特徴について考えていきたい。なお出版された書籍などの分野は様々だが、ここでは地理学や技術に関するもの等を「自然科学」、神学・語学を除いた論理学等については「人文科学」、対外向けのプロパガンダ冊子や政府に関係するものを「政府関係」、辞書・文法などについては「語学」、教義や神学などイスラームに関するものは「宗教」と、五つの分野にわけて分類したい。また、同じ本が再版された場合についても1種として別に数えることとする。

1. セリム3世の時代とマフムート2世の時代

それではまず、二つに分ける方法から始めてみたい。1797年から1807年にかけてのセリム3世の統治下にあった時期と、マフムート2世の時代にあたる1808年から1824年の時期ではそれぞれどのような分野の本が多く出版されたのだろうか。

まず、1797年から1807年にかけては、自然科学関係12種(34.3%)、人文科学2種(5.7%)、政府関係5種(14.3%)、語学11種(31.4%)、宗教5種(14.3%)と、11年間に35種の本が出版されている。これは1年あたりの平均で3.19種/年の割合で出版を行っていた計算になる。

次に1808年から1824年にかけては、自然科学3種(9.7%)、人文科学5種(14.3%)、政府関係0種(0%)、語学10種(32.3%)、宗教13種(41.9%)と、前の時代と大分違った傾向を示しているといえる。また、出版頻度については17年間で31種の本等を出版したので、1.82種/年の割合で書籍が出版されていたことになる。

出版頻度ではセリム3世の時期がマフムート2世の時代よりも1.8倍近く高くなっていることから、セリム3世期には印刷所が積極的に利用されていたと考えられる。一方マフムート2世期には資金難などで活動が難しかった様子が伺える。また、セリム3世の時代に最も多く出版された分野は自然科学であったが、マフムート2世の時代には全体の約10パーセント程度にまで落ち込み、最も著しく減少している。この他に大きく減少したのは政府関係の出版物で、全体の14パーセントを占めていたものが、一気に0パーセントになってしまっている。これに対してマフムート2世の時代に最も多く出版された分野は宗教関係の書物であり、全体の40パーセント以上を占めて、セリム3世のころの宗教関係の書物の割合と比べると、実に3倍近くの伸びを示している。語学に関しては両時代でほぼ横ばいになっているが、語学以外の人文科学分野の割合はマフムード2世の時代に2.5倍近くになっている。

2. 3つの時代区分

ここではハスキョイの工学校学校付属であった時期を 期 (1797 - 1801 年) ウスキュダルに移転してからイエニチェリの反乱で大きな被害を受けた年までを 期 (1802 - 1808 年) イェニチェリの反乱後の厳しい経営状態から 1821 年のギリシア独立戦争のあおりを受けてもう一度イスタンブル側に移るまでの時期を 期 (1809 - 1824 年) として時代区分を行い、これらの時代で印刷物にどういった変化があったのかということについて述べていきたい。

まず 期 (1797 - 1801 年) には全部で 12 種の書籍等が発行されたが、このうち自然科学に関するものは 5 種 (41.7%)、神学・語学を除く人文科学分野は 0 種 (0%)、プロパガンダ冊子等の政府関係では 3 種 (25%)、辞書等語学に関するものは 4 種 (33.3%)、そして宗教関係は 0 種 (0%) という分布で、平均して一年に 2.4 種の印刷物を発行していたことがわかる。

次の 期 (1798 - 1808 年) は、全 24 種の発行物のうち、自然科学分野 7 種 (29.2%)、語学・宗教を除く人文科学に関しては 2 種 (8.3%)、政府関係も 2 種 (8.3%)、辞書・文法書などの語学分野では 7 種 (29.2%)、さらに宗教に関係する分野では 6 種 (25%) の書籍などが発行され、平均して 4 種/年の割合で活動が続けられたことがわかる。

さらに 期 (1809 - 1824 年) には全部で 30 種の書籍が発行されたが、このうち自然科学関係 3 種 (10%)、語学・宗教を除く人文科学分野 5 種 (16.7%)、政府関係の刊行物は 0 種 (0%) になり、語学分野は 10 種 (33%)、そして宗教関係の書籍が 12 種 (40%) を占めており、一年あたり平均で 1.25 種の本を発行している。

まず目に付くのは、自然科学分野での発行物の減少具合である。 期には全体の 40 パーセント以上を占めていたものが、 期には 3 割に、そして 期には全体の 1 割程度に落ち込んでしまっている。同様にプロパガンダ冊子等についても、 期には全体の 4 分の 1 をしめていたものが、 期には 10 分の 1 以下に、更に 期には全く刊行されていなくなっている。これら二分野に対して、宗教関係の書物は順調に伸びており、 期は 0 パーセントだったものが、 期には全体の 25 パーセントに、そして 期には 期の 1.6 倍の 40 パーセントを占めて、五分野の中で最も多くの割合を占めるようになっている。同様に語学・神学等を除いた人文科学分野も、宗教分野ほどではないけれども、 期の 0 から 期には 8 パーセント、 期には 16.7 パーセントになり 期のほぼ 2 倍の割合を占めるようになっている。

こうした傾向は、工学校のテキストを確保するという目的で設立された印刷所が、セリム 3 世在位中に既に経営体制の変化から工学校で使用する以外の分野に目を向けていたことを示しているといえるだろう。平均して一年あたりの印刷頻度が一番高いのは 期であるが、この様に頻繁に書物が刊行されるときにあって、政府関係分野や自然科学関係の書物の割合が減っているということは、ニザーム・ジェディード時代に既に工学校印刷所の変容が起こっていたことを示しているだろう。つまり工学校とその周辺という限られた市場から、もっと広い市場を睨み、より一般的な需要を満たす分野への重心の移動が、既に

期で始まっていると考えられるのである。更に 期での政府関係の冊子の減少は、 期の様に印刷所を対外向けの小冊子印刷などで、有効に利用しようという気運が薄れてきている様子を表していると考えられる。

おわりに

18世紀から19世紀はじめにかけて、具体的にはセリム3世からマフムート2世の時代に至るまでのオスマン帝国の近代化への動きの中で、工学校は西洋技術を身につけた技術者の育成を目指したということで、国内外の情勢変化を大きく受けていたといえる。同様にこの工学校の内部に設立された工学校印刷所もまた影響を受けていたといえるが、それは、工学校が受けた影響とまったく同じではなかった。なぜならニザーム・ジェディード運動の一環として設立された工学校印刷所ではあったが、ウスキュダルに移転したことや、経営体制が変化したことで徐々にその体質が変化していったといえるからである。

工学校印刷所として西洋の技術導入のための手助けを行い、また国外向けの冊子を印刷するといった活動を行っていた1797年から1801年と、ウスキュダルに移転と経営の変化体制の変化で、需要がありそうな本を印刷しなければならなくなった1802年から1808年にかけての変化は、印刷所が国外から国内へとベクトルを変化していった過程と考えることができるだろう。このベクトルの変化は工学校自体が停滞する時代にはもっと顕著になっていき、ほぼ完全に国内もしくはイスラム世界へと向かうことになったといえるだろう。

本稿では、ケマル・ベイディッリの研究のごく一部のみにより依拠しており、また他の研究には手が届いていない。18世紀から19世紀のオスマン帝国の中で、工学校印刷所がどのような役割を社会的に果たしていたのかということや、新たな研究によって明らかになった印刷所の活動については今後の課題としていきたい。

参考文献

〔外国語〕

Kemal Beydilli, *Türk bilim ve matbaacılık tarihinde Mühendishane matbaası ve kütüphanesi:(1776-1826)*. İstanbul: Eren yayıncılık ve Kitapçılık, 1995

〔日本語〕

新井政美 『トルコ近現代史』 みすず書房、2001 年

永田雄三・加賀谷寛・勝藤猛 『中東現代史』 山川出版社、1982 年